

コンニャク新品種「みやままさり」の 特性とその栽培法

福島県農業試験場 こんにゃく試験地

平成10～14年度福島県農業試験場試験成績概要

分類コード 06-02-01000000

部門名 特用作物-コンニャク-品種

担当者 菊池 正・齊藤研二・平山 孝

I 新技術の解説

1 要旨

コンニャク品種「みやままさり」(群馬県農業試験場育成、旧系統名 群系70号)について、「在来種」、「あかぎおおだま」との比較により、特性と福島県における適応性を明らかにした。また、「みやままさり」の2年生栽培において最適な栽植距離、施肥量を明らかにした。

- (1) 「みやままさり」の球茎肥大倍率は6.00倍であり、「在来種」の4.51倍と比べて133%と高く、高収量が期待できる(表1)。
- (2) 「みやままさり」の生子の球状割合は81.9%であり、「あかぎおおだま」の16.0%と比較して高く、植付の機械化適応性が高い(表1)。
- (3) 「みやままさり」の生イモからの精粉歩留は11.1%であり、「あかぎおおだま」の9.6%と比べて高く、また、精粉収量も「あかぎおおだま」対比108.5%、「在来種」対比138.7%と高い(表1)。
- (4) 「みやままさり」の2年生栽培においては、栽植距離が畦間60cm×株間20cm、窒素施肥量が1.0～2.0kg/aで球茎肥大倍率、生子収量が高いことから、資材費等を考慮すると1.0kg/aが最適な窒素施肥量である(図1)。

2 期待される効果

- (1) 「みやままさり」は福島県内で多く導入されている「在来種」と比べて球茎及び生子収量、精粉収量が高いため、導入により増収が期待される。
- (2) 「みやままさり」は福島県の県南地方で多く導入されている「あかぎおおだま」と比べて球状生子割合が高いため、植付作業における機械化適応性が高く、植付作業の省力化が期待できる。
- (3) 「みやままさり」を導入することにより、コンニャク栽培面積減少の抑制、生産意欲の高揚が期待できる。

3 適用範囲

福島県内コンニャク栽培地域全域

4 普及上の留意点

- (1) 「みやままさり」の1年生においては、休眠することがある。
- (2) 葉枯病には「あかぎおおだま」よりやや弱い。

II 具体的データ等

表 1 品種特性

品種名	植付月日 [月/日]	地上部（2年生）			地下部（2年生）				加工（3年生）									
					球茎		生子		荒粉歩留 （%）	精粉歩留		精粉取量 （kg/a）	精粉粒子組成比（%）				精粉粘度	
		出芽期 [月/日]	開葉期 [月/日]	成熟期 [月/日]	収量 （kg/a）	肥大倍率 （倍）	収量 （kg/a）	球状割合 （%）		対荒粉 （%）	対生イモ （%）		～300 μm	300～180 μm	180～150 μm	150 μm～	K	c （%）
みやま まさり	5/24	6/28	7/8	10/9	243.9	6.00	44.5	81.9	15.7	71.0	11.1	57.3	32.5	53.3	9.2	5.0	215.3	0.91
在来種	5/24	6/20	7/9	9/29	188.0	4.51	29.1	94.8	19.2	63.5	12.2	41.3	30.2	54.3	10.0	5.5	203.3	0.92
あかぎ おおだ ま	5/24	6/20	7/2	10/9	257.0	6.17	63.5	16.0	14.9	64.7	9.6	52.8	32.1	53.0	9.4	5.4	213.3	0.91

注）1998～2002年度福島県農業試験場こんにゃく試験地系統適応性検定試験成績より平均値を算出、ただし、粘度数値のみ1999～2002年度平均値

出芽期：植付個数の40～50%が出芽した日、開葉期：全株数の40～50%が開葉した日、成熟期：葉が黄変し葉柄が萎縮し全株数の80～90%が倒伏した日

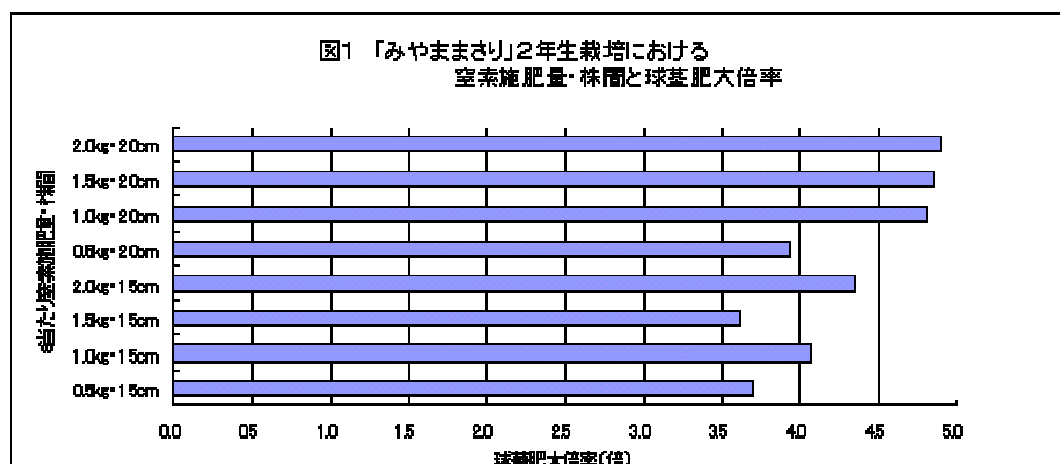
荒粉歩留：生いもを厚さ約2mmにスライスし、このうちの5kgを乾燥機で70～90℃で4時間乾燥した後の重量比率

精粉歩留：荒粉を粉碎して40gを臼に入れ杵で4時間ついた後に残ったマンナン粒子の重量比率

粒子組成比：精粉を段ふるいに1時間かけた後の割合で、300μm、180μm、150μmのふるいを使用

K：粘性指数、1%溶液を35℃で2時間攪拌後、B型粘度計で測定した数値から算出、（大きいほどよい）

c：溶液濃度、1%溶液の測定値から粘度計のローターの回転数が80rpmのとき、100poiseとなる濃度を算出、（小さいほどよい）



Ⅲ その他

1 執筆者

菊池 正・菅野雅敏

2 主な参考文献・資料

なし